



悠哉游哉(渡辺知也さんを送る)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清原, 文代 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/2691

渡辺知也さんを送る

渡辺知也さんが2004年3月末で大阪女子大学を定年退職される。1986年4月に本学英文学科教員としてご着任以来、18年間在職された。本学改組の1999年からは、国際文化専攻教員として種々の仕事を担ってこられた。渡辺知也さんへの感謝と感慨を込めて編んだのがこの頁である。

渡辺さん、どうかお元気で。

癒しの部屋の主

大平桂一

初めて渡邊さんを間近に見たのは、笠置山への組合のハイキングの時であった。コールテンの上下にベレー帽といういでたちで、なんと様になった不良中年紳士かと思った。ところが学校にもどりよくよく観察すると日常はジャージの上下にサンダルか、作務衣に下駄履きというラフなスタイル、これにはまいった。

女子大の改組で研究室が同じ階になり、用事で渡邊さんの部屋に行ってこれまたびっくり、床には厚い絨毯、ゆったりとしたソファ、机にはサモワールといった異次元空間、しかし居心地がよく何時間でもくつろいでいられるのであった。そこは癒しの部屋とも称され、心に悩みをかかえる私のような教員の溜まり場ともなっていた。

聞くところによると、退職後はスイスに移住されるとのこと。愛車のコンバーチブルトラバント（VWのエンジンを搭載した東独製の車。ちなみに彼は知られざるカーマニアである）を駆り、更に幸福なる人生を送られることを確信する。

人生の達人渡邊さんに幸いあれ！

悠哉游哉

清原文代

ここ数年教務委員を拝命している。心配性の私は「あの書類はもう出しましたか。」等々つつい小うるさく言ってしまう。20歳以上年上の渡辺教授に

対してもおそらく失礼な物言いが多々あったと思うのだが、温厚な教授は大人（たいじん）の風格で受け止めてくださった。この場を借りておわびと感謝を申し上げる。

12年前上海に留学していた時に楽しみにしていたテレビドラマがあった。ドラマは毎回こういうナレーションで始まった。

「包囲された城の中の人々は外へ逃げたいと思い、城の外の人々は中へ突入したいと思う。結婚に対してであれ仕事に対してであれ、人生における願望はたいていかくのごときものである。」

今にして思えば、当時の私はこの言葉の本当の含蓄を味わうことはできなかったが……

渡辺教授はまもなく「城」の外へ行かれるが、中にいらっしゃろうとも外にいらっしゃろうとも、悠哉游哉、きっとゆったりとかまえていらっしゃるのではないか。それでこそ文人のあるべき姿だろうと小心者は思う。

渡辺さんと鍵

古 林 清 一

渡辺さんから受けた教えとして一番、強く印象に残っているのは、彼が研究室に対する施錠を全くしないことです。このことは、一般的にはルースであるとか無神経であると見なされるかもしれませんが、私は卓見であると思っております。施錠をしないで毎日の生活をするということは、今でも日本の農村社会では一般に行われていることだと思えます。いちいち施錠して生活し、自分も他人も規則によって縛られ、神経をとがらせて、起こりうる不安にとりつかれて生きる人間の姿こそ渡辺さんから見れば愚かな人間の姿であります。

鍵によって身を守って生きている人間こそは現代管理社会のもとで管理された病理的人間のありかたであります。そういう人間の威張っている社会よりは、たくましく元気な人間の生きている社会のほうがまともであると言えます。人間の一生は短く、一瞬のことにすぎません。限られた人生を生きる我々は、規則やルールに気を使い、これらを自己目的と見なすのではなくてこのような人為的約束事を相対化して生きるべきであります。